「悔い改めへの呼びかけ」（ルカによる福音書一三章一～九節）

1　ピラトによる虐殺事件

今日からルカ一三章に入ります。ただ今日の箇所は、まだ前章とのつながりで理解されるべきところです。一二章一節から始まったイエスの長い教えの最後の部分、結びを構成している箇所です。

一二章一節から始まったイエスの教え、その基調をなしているのは、世の終わりは近い、神の国は近い、それゆえ、それを迎えるのに相応しい生活をしなさい、というものでした。その調べは、ここでも続いています。むしろ強められています。「悔い改めなければ」という言葉がここに二回出て来ます。この端的な言葉が、それを明らかに示しています。

「悔い改めなければ・・・滅びる」（三、五節）というのは、もちろん何か脅かしているのではありません。別の言い方をすれば、いつも神と共に歩むように、ということです。自分中心になりがちな生活、世俗的になりがちな生活、その私どもの生活、その全部を、改めて転じて、生ける神へと向かわせること、神のご支配のもとにおくこと、そうしていつも神と共に歩むように、ということです。それなら終わりがいつ来ても心配する必要はないのです。

さてイエスの教えの聞き手という観点から、ここまでを振り返ってみますと、これまでにも時々に注意してきたように、それは、弟子たちであったり、群衆であったりしました。

今日の箇所の聞き手は、だれでしょうか。前半（一～五節）は「何人かの人」のイエスに対する言葉から始まっていて、イエスは彼らの言葉を取り上げ「答え」ています。ですから前半は、ここに集まっている大勢の人に語られたと受けとっていいと思います。しかし後半の譬え（六～九節）、これは弟子たちに向けられたもののように思われます。厳密に分ける必要はありませんが、そうした想定ができます。これはもう一度後で触れたいと思います。

> ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を、彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」（一～三節）。

これを読むと、新しくここに「何人かの人」が来て、イエスに何かを言ったように思われますが、そうではなくて、イエスの話しを聞いていた人の中に、何かを言った人たちがいたということです。質問したというより、イエスの語ることに触発されて言葉を発したのです。「何人か」とあるので、複数の人が、期せずして同じことを口にしたのでしょうか。

何を口にしたかといえば、それは、ローマ総督ピラトによるガリラヤ人虐殺事件でした。ここには、「ピラトがガリラヤ人の血を、彼らのいけにえに混ぜた」と書いてあります。これは、一つの表現であって、現実は、ガリラヤから来た巡礼者たちがエルサレム神殿で動物犠牲を捧げているとき、ローマの官憲によって虐殺されたという事件でした。

いま申しましたように、ここは、彼らが「告げた」（口語「知らせた」）のであって、質問したのではありません。しかしなぜ、この事件のことを、ここで口にしたのか、持ち出したか、それはここまでのイエスの教えと関係があります。

イエスの教えは、世の終わりが近い、神の国は近い、言葉を換えて言えば、神の裁きが近いということでした。一二章の終わりでは、だから、訴える人とは、裁判所に一緒に行く途中で仲直りするように勧めていたわけです。罪をかかえたままでは裁かれるからです。

これを聞いていて、何人かの人が、ピラトの事件の犠牲者たちも、イエスのいう裁きの一例だと考えたのです。殺された人々は他のガリラヤ人よりも罪が深かった、だからああした形で死んだ、それは神の裁きだ、そのように、彼らはイエスに「告げた」のです。イエスに質問したのでも、問い詰めたのでもありません。裁かれ殺された者としてのガリラヤ人には他の人以上に罪があった、そう考えて彼らはあの事件を口にしたのだと思います。

2　災難と罪

これに対して、イエスはどうお答えになったのでしょうか。その答えには、何より彼らへの問いが含まれていました。問い返しを含むその答えは、きわめて重要なことを語っていました。

それを考える前に、まずこのピラトの事件と、それに関連して、イエスご自身が引き合いに出した、シロアムの塔が倒れて犠牲者が出たという事故、これを取り上げてからイエスの答えを考えてみたいと思います。

さてピラトによる虐殺事件です。この事件は他の福音書に書いてありませんし、一般的にも確認されていないことのようです。しかし同様のことが、起こっていたことは、初代教会と同じ時代のユダヤ人歴史家ヨセフス（37-100 頃）の書いたものに中にも出て来ます。

詳しくは申し上げませんが、ヨセフスによると、ピラトは、ユダヤの総督になるとすぐ、ローマ皇帝（カエサル）の像を、夜ひそかにエルサレムに持ち込み、ユダヤ人の宗教的な誇りを傷つけることをしています。激しい怒りと抵抗に遭い、撤去を余儀なくされています。

もう一つ、その後のことです。ピラトは、神殿の神聖な宝物（ほうもつ）を売り払って、水道を建設します。民衆はいきどおり、エルサレムの官邸に押し寄せ、激しく抗議します。しかし、このときは、ピラトは、騒ぎを予想し、群衆のあいだに兵士をまぎれこませて、剣の代わりに、棍棒で民衆を打ち、逃げ惑う民のあいだに多数の死者を出したのです（ユダヤ戦記Ⅱ９）。

こうしたことがあったことを知れば、ルカがここで伝えていることも、おそらく事実であったろうと思います。

巡礼のガリラヤ人たちがエルサレム神殿で殺されたのです。イエスも同じガリラヤ人です。心に思い描いていることは違っても、いま同じくエルサレムへと歩みを進めています。その心は、どんなに重苦しいものであったかと思います。しかしイエスは冷静でした。彼らに答えるに当たって、自ら、別の例を付け加え、その上で一つの答えを与えています。

また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる（四～五節）。

ここにある、シロアムの塔の崩壊のことも、先ほどのピラトによる虐殺事件と同じく、他には伝えられていませんが、事実と考えて間違いありません。シロアムの地名は私どもも知っています。エルサレムの郊外、池で有名な場所です（ヨハネ福音書九章）。その塔が倒れ、十八人が犠牲になったのです。

これは一般には事故というものです。巡礼のガリラヤ人が殺された事件とは違います。しかし多くの人が「災難に遭った」（二節）という点では、違いはないのかも知れません。イエスは、事件と事故、これら二つのケースに対して、まったく同じ見方を示しています。

何よりも、イエスは、先ほど申しましたように、ピラトによる事件をイエスに伝えた人たちに、問い返しています。そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのはほかのどのガリラヤ人よりも彼らが罪深い者だったからだと、あなたたちは思っているのか、また犠牲になったあの十八人も、エルサレムの他の人たちよりも罪深い者だったと、あなたたちは思っているのかと。

イエスの答えです。「決してそうではない」。イエスは災害で死んだ人、事件に巻き込まれた死んだ人を、罪の結果とすることを明確に否定しています（ヨハネ九・二参照）。それが、このイエスの答えに含まれている第一の意味、私どもに対する最初のメッセージです。

さらにイエスが問い返していること、それ自体に、私どもは注意しなければなりません。ピラトによる事件を彼に「知らせた」人々の問題です。そこには、自分たちは罪深くないという、いわば自己義認（グリーン）があったのではないでしょうか。イエスは言います、「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」。すべての人に悔い改めが求められています。これがイエスの答えの二番目の意味です。

3　神の忍耐と憐れみ

しかし、悔い改めるということは、どういうことでしょうか。それは自分の力でできるのでしょうか。悔い改めは、神の憐れみのゆえになされるのであり、御霊の導きによります。それが、今日のイエスの答えの、第三の意味、メッセージです。そこで

六節以下、イエスの譬えを取り上げます。

ある人が自分のぶどう園にいちじくの木を植えておき、実のなるのを楽しみにしていたというのです。ぶどう園にいちじくを植えるのは、当時は、変わったことではなくて、果樹園と考えてもらっていいと思います。実のなるまで約三年といわれています。ですから、この主人が「もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない・・・」（七節）と言っているのは、実をつける可能性が出てから三年ということです。最初に植えてから数えれば、もう六年が経っているということです。

主人はしびれをきらして、切り倒せと、園丁に命じます。しかし園丁は、こう言って主人をなだめ、執り成すのです。「ご主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください」（八～九節）。

先に私は、今日の箇所の後半、譬えの部分は、群衆ではなく、弟子たちに向けて語られているように思われると申しました。それは譬えの中に出てくる「園丁」に主イエスを見るような思いがするからです。それを弟子たちははっきり感じとったのではないかと思います。

「今年もこのままにしておいてください。来年は実がなるかもしれません」。ここに、イエスの執り成しを受けている私どもの人生があるように思います（ローマ八・三四）。「ペトロの手紙二」に次のような言葉があります。

> ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで、皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです（三・九）。

ここにある「遅い」というのは、世の終わりの到来、神の救いの到来が遅いということです。

しかし神は決して遅らせているのではありません、むしろ神は、人々の悔い改めを待って忍耐しておられるのだというのです。このペトロの手紙の聖句によって、ルカが、イエスのこの譬えを、ここに置いた意味が分かるような気がします。

私どもにとってありがたいのは、「今年もこのままにしておいてください。来年は実がなるかもしれません」というキリストの執り成しです。その間の神の忍耐と憐れみです。

この時を用いて私どもは悔い改めることを求められています。もちろん私どもは簡単に、自分中心の生活から、いつも神と共に歩む生活に入っていくことができるわけではありません。また、それは一度そうしたからそれでいいというものでもないことです。私どもは、神の忍耐の中で、かろうじて悔い改めの道を歩むことができるにすぎません。

こうして私どもは、キリストの執り成し、神の忍耐、御霊の助けの中で、歩むことを許されています。私どもの人生の方向を、くり返し、神へと定め直して歩んでまいりましょう。

（二月六日）